1960 年代のミニ開発住宅地におけるコミュニケーションに関する研究
―その3　S地区における近隣商店の活動実態―

日大生産工(院)　○香山 愛理
日大生産工　　曽根 陽子

1. はじめに

本研究は、既発表した「1940年代初頭の川口市におけるミニ開発住宅地に関する研究」[文]の後続研究である。前報告では店頭アンケート調査により地区内の高齢者は地区外のスーパーマーケットより近隣商店をよく利用していることを報告した。本報告は、住戸アンケート調査とY商店を中心とした参加型観察調査による商店の利用状況について報告する。

2. 研究対象地区の概要

S地区は高度成長に伴い店舗が増加した。しかし、1989年以降は地区内の人口の減少とともに周辺に大型店舗やドラッグストアが開店し、店舗数も減少している 。

現在、対象地区内の商店は図１のように分布しており、肉屋・八百屋などの食品店が数件ある。

Ｙ商店は、Ｓ地区の総合食品店であり40年ほど前から経営している。二代目の店主が母親・弟・妻と従業員を含む十数名で家族経営している。Ｙ商店は近隣の商店が閉店する度にその場所を借りて商店の充実を図るために総合食品店となった近隣商店である。

3. 研究の方法と内容

3.1住戸アンケート調査

研究対象地区内の各住戸に町会を通じ、Ｓ地区の全住戸(集合住宅を除く)1660件に配布し 704件回収した（回答率42.4%）。行った対象範囲(前研究のヒアリング調査と同じ)の住戸804件のうち、有効回答数は313件だった。

a.　日時：2005 年 7 月 6 日～7 日に配布
　　2005年7月21日～22日に組ごとに回収

b.　方法：商店の利用率や立ち話をする場所など、該当するものに関しては○印をつけるという形式で行い、付き合いの程度は非常に多い・10名以上・数名いる・いないの４つの選択肢を設けて行った。

3.2.参加型観察調査

研究対象地区内の唯一の総合店舗であるY商店の一日の様子を観察した。

a.　日時：2006年2月6日～8日、2007年10月9日～11日
　　(am.9:30～pm.8:30)

b.　方法：筆者が実際に店頭で店員として手伝いをしながらやりとりの様子を観察を行った。

図1.　S地区の商店の分布図

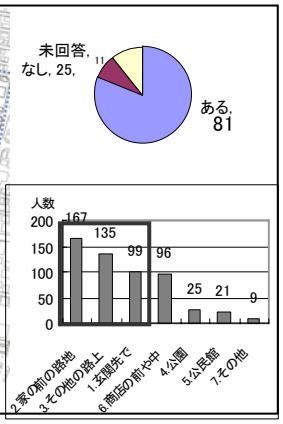

図2.　立ち話をする場所の有無

4. 調査・結果

4.1.住戸アンケート調査

○地区内の立ち話

立ち話をすると答えた人は335件中253人で（図2）、これは全体の81%を占めていてコミュニケーションが希薄になっているといわれる近年の住宅地に比べ、この地域の住民はよくコミュニケーションをとっているということが読み取れる。実際にこの地域を歩いてみた時にも住民が自分の家の前の路上や隣の路上で会話している姿がみられた。

○立ち話の場所

立ち話の場所は、「家の前の路地」、「その他の路上」を合わせて54.7%(302/552人)と路上で立ち話する人が半分を占めている。また、その他に「玄関先」17.9%(99人)、「商店の前や中」17.3%(96人)が多い。「玄関先」と「家の前の路地」を合わせると全体の48.1%(226人)が家の近くで立ち話をしていることがわかる。また、立ち話は家の近くで行われる他に「商店の前や中」で行われている。これは、他地区ではあまり見られない特色である。

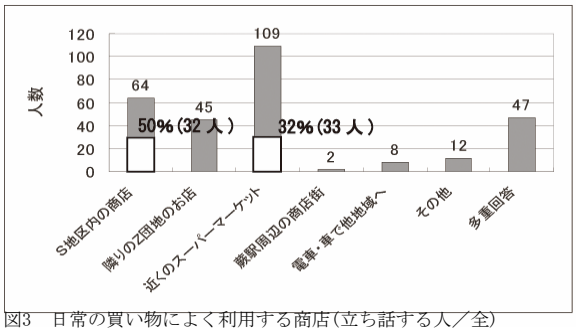

図3　日常の買い物によく利用する商店(立ち話する人／全)

Research on the Mini-development Residential Area S of the 1960s
― Part.3 A study about the stores use situation―

Eri KAYAMA and Yoko SONE

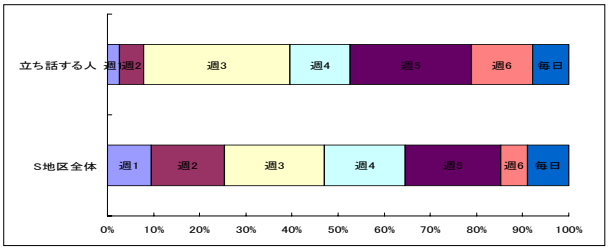

図4　日常の買い物頻度

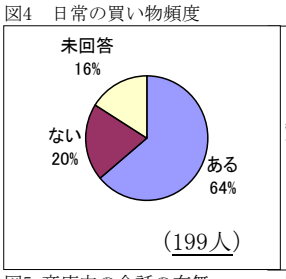

図5. 商店内の会話の有無

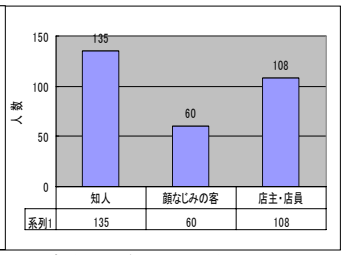

図6. 商店での会話をする相手

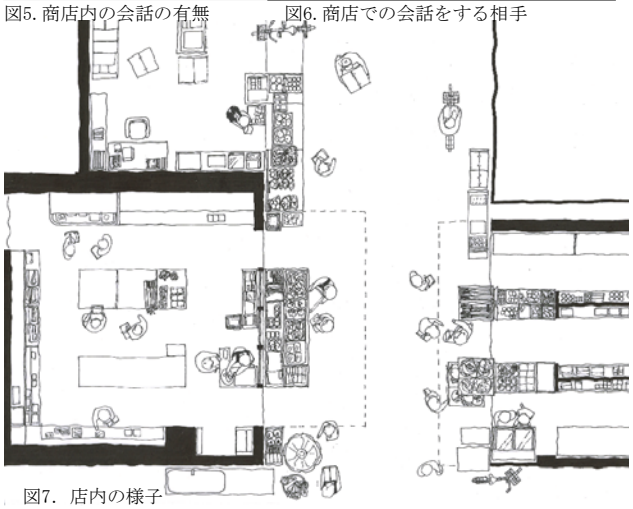

図7. 店内の様子

「久しぶりね。最近見ないけど元気にしていたかしら？」「最近腰を悪くして外出できなかったのよ。」「季節の変わり目だからね。食事はどうしてるの？」「昨日ここに電話しておかゆのパックを届けてもらったのよ。今日はもうだいぶよくなったのよ。」･･･(略)「今日はもうさっき来た時に買い物しちゃったから、もう帰るわね。じゃぁまたね。」

図8. お互いの安否についての会話

○日常の買い物場所

図3に示すように「S地区内の商店」を日常の買い物場所と答えた人の中で立ち話すると答えた人は50%(32/64人)を占めている。「近くのスーパーマーケット」と答えた人の中で立ち話すると答えた人は、32%(33/109人)である。買い物中に店内で立ち話をすることは「近くのスーパーマーケット」などの大型店舗にはあまりみられないＳ地区内の商店の特徴である。

○日常の買い物頻度

平均頻度は対象地区全体の週3.75回に比べて商店で立ち話をする人は週4.15回と高いことが分かる(図4)。

○会話について

S地区の商店を利用する際に「誰かと会話をすることがあるか」という問いに対して「ある」と答えた人が全体の64%(199/313人)を占めている (図5)。S地区内の店内で会話をする相手は、「知人」67.8%(135人)、「店主・店員」51.7%(103人)の割合が高い(図6)。また、少数ではあるが「顔なじみの客」30.1%(60人)との交流が商店内であることが分かる。さらに、図5の商店内の会話があると答えた人(199人)に対して図6の回答数が約1.52倍(303人)であると多いことから重複回答が多いことがわかる。これは商店内で一人の客が「知人」と話すことがあったり、「店主・店員」と話すこともあったりとさまざまな交流が生まれているということである。

4.2参加型観察調査

図7は参加型ヒヤリング調査で観察した商店の様子を示したものである。図のようにＹ商店は、Ｓ地区の主要道路(旧農業用水路3.7m)と位置指定道路(2.7m)に隣接している。そのため、店員は移動や作業に路上を利用している。この商店は野菜などの生鮮食品を中心に品揃えがよく、食材を小分けに売っており１人分の食材を買い求めやすくなっている。また、お惣菜売り場には50代前後のパートさんが４人ほどで毎日手作りしたものが並んでいる。

○あいさつについて

この商店の店員の話しかけ方は、「いらっしゃいませ」などではなく「おはよう」というあいさつである。客から店員に「おはよう」「ご苦労さま」などの声をかけて話しかけてくることもあった。主要道路に面しているため、帰り途中の小・中学生とのあいさつも見られた。

○買い物の様子について

AM9:00頃に隣の居酒屋から出てきた老人たちが店員に話しかけてから、１品や２品のお惣菜を買って家に帰っていく。AM11:30～PM2:00の間にかけて20代後半～30代前半の女性が子供をつれて散歩をしながら買い物をしている様子が多く見られる。またPM4:00～6:00にかけて路上に面した店頭商品をのぞいてから黄色い買い物かごを手にし、店内路上を往復しながら買い物する人が多く見られた。PM6:00～8:00にかけては1人暮らしの若者がコンビニを利用するように卵・牛乳などを単品で買っていた。高齢者は利用者の大半を占めており、少量の食材を数回に分けて買いに来ている。

○会話の内容

図8の店先の友人同士の会話のように店先で人の安否について会話をしている。このように商店は生活の必需性が高い場である。また、「昨日ここに電話しておかゆのパックを届けてもらったのよ。」の例からもわかるように、この商店が地域に密着しているということも読み取れる。

5. まとめ

Ｓ地域の人口の多くは、1960 年代に一斉に転居してきた同じ世代の高齢者であり、徒歩圏内に位置しているＳ地区内の商店を利用することで日常的な生活範囲の中で人と出会っている。利用者の多くは何回かに分けて少量の買い物に行くことから、ただ「食材を買う」という行為だけでなく、「商店に出向く」という行為が生活の楽しみになっているのである。

近隣商店は、この地域で暮らす高齢者や単身高齢者にとってお互いの安否を気づかい行動を共にするなど生活の場や行動範囲を豊かに広げる場となっている。

【参考文献】
文１曽根陽子ら：「1940 年代初頭の川口市における身に開発住宅地に関する研究、その１地区の人口の変化/その２近隣商店の実情/その３飲み屋の実態」、日本建築学会大会学術講演会概要集、№5764～5766、2005 年(近畿)
曽根陽子ら：「1960 年代のミニ開発住宅地におけるコミュニケーションの実態に関する研究/近隣商店の利用状況に関する分析」、日本建築学会大会学術講演会概要集、№5617、2007 年(九州)